

学校設定科目 教養基礎「国語」

— レポート作成 —

国語科 植田 敦子
 畠山 俊

1 はじめに

2019年度の全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会では、教養基礎「国語」の総括として、教養基礎「国語」全体の説明と、具体的な実践事例、レポート作成や評価について発表を行った。

2 発表概要

最初の5分で植田が、教養基礎全体の話をした。高大連携授業の一環として、教養基礎という学校設定科目を2005年度から設けていること、国語科の目標や具体的なカリキュラムやテーマについて報告した。

残りの時間は畠山が、「書くこと」の指導について話をした。本校国語科では1年次に夏の新書レポート、冬の学年末レポート、2年次に夏の意見文作成、冬の学年末レポートと2年間に4本のレポートを課している。それぞれ400字詰め原稿用紙5枚程度の分量である。それぞれの学年の学年末レポートは国語の授業で取り上げた教材について各自が調査し、レポートに仕上げる。他の1年次の新書レポートは「調査や研究の結果としてわかった事実を他者に報告する」ものとして考えている。もちろん、自分の意見を書かなくてよいわけではないが、中心は新書2冊以上の中から得た事実をわかりやすく書くものと考えている。それに対して、2年次の意見文は「あるテーマについて問題を提起し、それに対する自分の意見を論理的に述べる文章」と考えている。今回は2年次の意見文について報告した。実際の授業では、7月に意見文を書かせる意義、意見文の書き方、調査の方法等を説明した後、授業時間内に個人で使える時間を設けた上で、最終的には個人作業として意見文を作成する。夏季休業明けに提出させる。また、事前にルーブリックも示し、どのように書くかの指針とするようにアドバイスする。

3 質疑応答等

意見文では概要を書くように指導しており、それについての質問があった。欧米の大学で課される essay を意識して概要を書かせている旨、答えた。また、読んで評価することのたいへんさに対する指摘もあった。読むのは実際たいへんだが、決して嫌いではないとの返答をし、評価に関してはルーブリックによる自己評価と教員の評価、また、記述によるコメントも評価の一環であるが、客観性については課題が残ると答えた。